

「宗教」現象に着目した心理臨床に関する研究コロキウム
Colloquium for Psychotherapy Focused on “Religious” Phenomena

研究代表者 東畑 開人 (D1) 教員 皆藤 章
研究分担者 中藤 信哉 (M1), 西浦 太郎 (M1), 菱田 一仁 (M1), 渡辺 潔 (M1),
長崎 励郎 (M1), 佐藤 健 (M2), 山村 総一郎 (M2), 森田 健一 (D1),
谷野 幸子 (D1), 淀 直子 (D1), 内藤 みちよ (D2), 酒井 律子 (D3),
根本 真弓 (D3)

〔研究目的〕「宗教」に着目した臨床フィールドワークの方法論的試案

本コロキウムでは、「宗教」を「価値体系における周縁」と定義して、そのような色彩を色濃く持つ場・トポスへと臨床フィールドワークを行い、そのことによって心理臨床に資する知見を得ることを大きな目的とした。このとき、このような研究は、従来ほとんど手付かずのまま残された分野であり、それゆえに本コロキウムでは、そのような研究のあり方自体を可能にするような方法論的基盤を開発する必要に迫られ、今期において取り組む課題とした。すなわち、周縁性を帯びたトポスとは心理臨床的にいかなる意義を持つ場であり、そこから知見をくみ出すための臨床フィールドワークとはいかなる方法であるのかを明確にし、今後研究を積み重ねて行く基盤とすることが目的となった。このような基盤を確固たるものにすることによって、心理臨床学に新たな方法論による知見の集積が可能になることが期待され、学術的に意義ある研究になると考えられた。

〔研究経過〕

本コロキウムがいまだ確たる知見のない分野に対する開発的な研究であるゆえに、まずは「宗教」現象についてのディスカッションを何度も重ね、その中で「心理臨床に資する」という軸を大切にしながら、自らの立場を自覚的に形成していった。このとき、心理臨床の専門家だけではなく、教育社会学院生の長崎励朗氏が参加し、異なる視点からの意見をディスカッションしていくことによって、心理臨床固有の「宗教」という発想と、臨床フィールドワークという方法を洗練していった。このような自らの固有性を確立するための作業に、他者性を導入し、それが鏡として機能することは、きわめて有

意義な作業であった。

以上のディスカッションを経る中で、理論的な検討に限界を感じ、実際にフィールドワークの実践を行い、その「体験」を得ることで、研究の進展が見込まれることが共有され、いまだ方法論に対して不鮮明な認識しかない状況ではあるが、あえて実践を行うこととした。

その舞台として、奈良県川上村が選ばれ、研究者全員でその地に赴いた。このとき、それぞれの「体験」こそが、研究を進めて行くための、主要なツールとなることから、フィールドワークの後に、それぞれによって体験記が執筆され、それを基礎データとして、前述した本コロキアムの課題に取り組むこととなった。

フィールドワーク後の体験記をつぶさに検討する中で、その書かれた内容よりも、そこに通底している主体の「体験」モードに焦点を合わせることが有効であることが示唆された。すなわち、書かれた文章そのものではなく、文章が書かれているときの、主体の「体験」、イメージの動的なあり方にこそ、フィールドワークの本質が表現されていると考え、そのような観点の下に体験記の検討が行われた。以下にその成果を示す。

〔研究成果〕

まず「宗教」現象に着目することとは、「他者性」への接近と交流を意味するものであり、周縁性を帯びたトポスへと赴くときに、心理臨床面接におけるクライアントとの交流と同型の心の動きが必要とされることが見出された。すなわち、川上村の独特の雰囲気に触れた際の主体の「体験」モードは、まさに未知のクライアントとの出会いにおける心理臨床家の心の動きと同型であり、ここから外界における何らかの場所とは、決して心理臨床面接から遊離するものではなく、むしろ「体験」や心の動きの相においては、近接する事態であることが示された。ここに、外界へのフィールドワークという発想の方法的基盤を求めることが出来る。

そして、臨床フィールドワークという方法については、文化人類学などのフィールドワークとは異なり、心理臨床家固有の「体験」モードでなされることを本質とすることが示唆された。すなわち、心理臨床家が外界に赴く時に、研究者と衣替えを行なうのではなく、依然心理臨床家として機能し、「体験」を行なうことこそが、臨床フィールドワークの本質であり、ここで得られる知見とは、対象の性質を記述するものではなく、対象と主体が交流する際の心の動きを記述するものであることが示唆された。

以上のような方法論的な基盤が本コロキウムから導き出された。これらの基盤において、今後臨床フィールドワークを積み重ねて行くことによって、方法論的な検討を超えて、具体的な成果を挙げて行くことが可能になると考えられる。同時に、具体的な成果を世に問うことによって、方法論的基盤もまた洗練されていくことが期待される。その意味でも、今後は、具体的な成果を実際に出版し、それが心理臨床にいかなる形で貢献しうるのかを明らかにしていく必要があると考えられた。